

38度線の向こう側を訪れて

——朝鮮民主主義人民共和国調査ノート——

山本かほり・小笠原由香・伊藤亜衣¹⁾

1. はじめに——「教育」の場としての朝鮮民主主義人民共和国

本稿は朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮）での「フィールドワーク」の記録をまとめたものだ。朝鮮への旅自体は、特に「フィールドワーク」をうたったものでもなく、また、愛知県立大学の関与は全くない。あくまでも、たまたま本学に所属する教職員、学生がそれぞれ個人の立場で参加したものである。しかし、5泊6日の滞在は、まさに社会調査の「教育現場」そのものだった。

「自明だと思っていることを疑う」「他者の世界を理解する」「異文化理解としての社会調査」など、社会調査法の授業では様々な言葉を使って調査の意義を説明するが、朝鮮滞在はその実践の連続であった。この「フィールドワーク」に、来年4月から大学院で社会学とジャーナリズムを研究しようとしている本学卒業生と本学学生が参加し、実践で多くのことを学んだ。本稿はその「調査ノート」である。共著者それぞれが分担執筆し、議論の末、本稿にまとめたものである。

さて、「北朝鮮」、朝鮮は日本から地理的には最も近く、しかし、おそらく多くの人にとって、心理的には最も遠い国に、日本人学生と日本人教員を連れて行きたい——こんな相談を在日本朝鮮人留学生同盟²⁾(留学同)の若い専従職員から受けたのは、2012年の初め頃だった。この訪朝団の名称は「日朝友好学生・教員訪朝団」といい、これまで不定期ではあるが、4回ほど訪朝団を組んで、朝鮮を訪ねたという。

団の趣旨を簡単に言えば、「等身大の朝鮮を知ってほしい」というものだ、私があらためて言及するまでもなく、朝鮮に対する日本のイメージは最悪だ。マスコミの悪意としか思えないような朝鮮に関する罵詈雑言または

嘲笑をこめたメッセージなどを頻繁に受けている私たちは、朝鮮も人が住むところであり、そこに、私たちと変わらない人びとの日常生活があるという当たり前の事実すら想像できなくなっている。

もちろん、こうした朝鮮に対する差別感情は、植民地支配時代からいっかんして日本社会の根底に流れていると思われるが、特に朝鮮に対する感情の悪化は2002年9月、当時の小泉純一郎首相が訪朝し、金正日総書記と会談、その場で金正日総書記が日本人拉致を認めたことをきっかけとしているように思われる。そもそもこの会談では「日朝平壤宣言」がだされ、両国間の国交正常化にむけて双方が努力をしていくといった内容が採択されている。しかし、このような本来の意義はすべて無視され、日本社会は「拉致被害者」の立場でのみ、朝鮮に向き合う（といえるのかも疑問）ことになった³⁾。

そもそも、朝鮮半島がいまだ分断状況にあるという現実の中、日本は南側の大韓民国（韓国）を唯一正当な国家とみなしてきた。韓国との国交回復は1965年だが、北側の朝鮮とは国交がないままである。朝鮮半島の分断は直接的には、米ソ対立を軸とした冷戦構造の中で起きた1950年～1953年の朝鮮戦争が原因である。しかし、朝鮮半島が米ソによって支配されるその背景に、日本の植民地支配（1910年～1945年）があったことは疑いようのない事実である。そして、その植民地支配時代に、日本は朝鮮半島の人びとに耐えがたい苦痛を与え、朝鮮の民族性——言葉、文化、名前など——をすべて否定し、土地や資源などを収奪したという歴史をもつ。日本はこうした歴史の責任に対して、なんの謝罪も保障もしていない。

このような事実を無視して、朝鮮と言えば拉致、その後、核開発、(日本では「事実上のミサイル」という形

容詞がつく)人工衛星などのニュースが出るたびに、そのニュースの語られ方に何の疑問も持たないまま、「北朝鮮は怖い国だ」「北朝鮮は悪だ」といったイメージが日本社会に広く浸透していった。他国の核実験や人工衛星打ち上げについては何ら問題視されず、「国際社会」という名の下で、朝鮮のみ一方的に批判的な報道だけが流されるのが今の日本の状況である。

したがって、留学同から訪朝団を出したい、しかも主たる対象は日本人学生と大学教員だと言われた時に、正直言って、その募集に手が上がるのだろうかと思った。しかし、留学同が提示する趣旨は十分に理解できたし、また賛同もしたので、その訪朝団のメンバーとして訪朝することに同意をした。自分の足で訪ねて、自分の目でみて、自分の耳で聞いて確認する——社会調査の精神そのものでもある。これがうまくいけば、学生にとっていい勉強の機会になるとも考えた。自分のいる社会を相対化して物事を考えるいいチャンスになると思ったのだ。

結果、2012年8月末に出た訪朝団には京都の日本人学生4名と私を含め日本人教員2名、そして、そこに在日朝鮮人学生3名、さらに留学同の職員が引率で1名、合計10名の訪朝団が結成され、北京一泊を含む6泊7日の訪問が実現した。

この時は、私が事前に知っていた人は一人もいなかった。留学同の引率者は以前から親しくしていたが、ほかは全員北京で初顔合わせ。どんな日本人学生が朝鮮に行くのだろうか?と興味を持っていたが、実際に会ってみると、朝鮮に関する知識などほとんどなく、ただ、大学生活を送る中で、留学同にかかわる在日朝鮮人学生を知り、かれらから誘いを受けて、朝鮮に行きたいと思ったという。これまで、朝鮮半島や在日朝鮮人に関わる人には数多く会ってきたが、ほとんどが何らかの市民運動なり歴史、政治を含む市民講座などへの熱心な参加者だったので、参加の学生たちの「普通さ」(としか表現できない)には拍子抜けするほどだった。

しかし、かれらと一緒に過ごした6日間は楽しかった。全員おとなしく、あまり感情を表に出さないので、いったいどう思っているのだろうか?と内心不安だったし、朝鮮側の受け入れ機関「朝鮮対外文化連絡協会(対文協)」の案内員も、私に時々「学生たちはどう思っているんでしょうね?」と不安を口にした。

それでも、最終日、対文協へのお礼の食事会の席で、学生たちは一言ずつ感想を述べた。学生たちの声は、朝鮮に実際に来てみると、いかに今の日本社会の報道、それを鵜呑みにしている社会的雰囲気か歪んでいるかということに気がついたという至極まっとうなものだった。

かれらが対文協にリップサービスで言っているとは思えない、真剣な表情と口調、そして、滞在中つきっきりでお世話をしてくれた対文協に心からの感謝をあらわしていた。私はそれを聞いて、胸を打たれたし、それに聞き入る対文協も静かに喜びを表情に浮かべていた。

さらに私自身、印象的なのは、当時大学1年生だった女子学生だ。活発な学生で、彼女の滞在中の不満は自由に行動できないことだった。朝鮮では外国人や海外在住の朝鮮人が訪問する際、必ず担当の受け入れ部局から案内員がつき、専用の車が用意される。そして、原則的には案内員がつかない限り、ホテルの外にでることはできない。彼女はそれが不満だったのだ。バックパッカーに憧れていた彼女は自由に町を歩き、道行く人と自由に言葉を交わしてみたいと考えていたようだ。だから、時々「なぜ外に出たらいけないんですか?」と不満をあらわにしていた。そのたびに、私や留学同の引率が「国交がないということを考えてほしい。今の政治状況の中で朝鮮に様々な社会的制約があることを理解してほしい。日本は朝鮮の人の入国を一切拒否している中で、こちらは私たちを受け入れている。この関係が一方的なものであることも考えてほしい」と話した。それでも不満そうだったが、最終日の夜、すでに12時を回っていたが、彼女が私たちのところにやってきた。私は対文協の案内員いつものようにお酒を酌み交わしながら、いろいろな話をしていたその席に現れたのだ。そして、「一言だけ言わせてください」といい、「今の日朝関係に何の考慮もすることなく、自分のわがままだけを言ってしまった。申し訳なかった。最後の日の夜になってこの5日間を振り返ると、自由に外に行けないと不満を言っていた自分がまちがっていたと気付いた」と話した。それを聞いた対文協は一言「ありがとう」と言った。そして、そのまま彼女も席にすわり、結局2時半まで話をして過ごした。

私は学生のこうした小さな変化に希望を感じた。そして、留学同の「来年もやりましょう」という誘いに迷いなくのってしまい、訪朝団の「賛同人」として募集にも協力をすることにした。

そして、今年。実際に募集の段階になると、私にも様々な躊躇が生まれる。まずは費用。北京を經由して朝鮮大使館でビザを受け取り、一泊して平壤に向かう。飛行機代だけでも14万円前後になる。そして、朝鮮も外国人価格の設定(中国にも旧ソ連にもそんな時代があったと聞いている)なので、決して安くはない。結果、26~27万円程度の参加費となる。そのような金額を出して、朝鮮に行きたいという学生はいるのだろうか?ま

た、私自身は過去の訪朝経験から、朝鮮の良さが分かっているが、そしてこれが安全な旅であることもわかっているが、偏見あふれるイメージが蔓延する中で、学生の親たちは認めてくれるのだろうか？ などの迷いが生まれるのだ。

しかし、過去の訪朝から帰ってきて、機嫌良く楽しかったと話す私を間近に見ていたのか、朝鮮に行ってみようと思った若い人が二人いた。この報告文の本文を書く二人だ。前述のように、一人は社会学、もう一人はジャーナリズムを志し、来年4月から大学院に進学する。こんな二人にとって、訪朝は実践的に学ぶ格好の機会だろうと私は考えた。なぜ行きたいと思ったのか、行って何を感じたのか、そして、何を日本社会で伝えたいと考えているのかは、後に続く二人の報告を読んでほしい。

ここでは、私にとって朝鮮訪問がどのような意味を持つのかということを書いておくことにする。

これまで、何度か書いてきたが、私が訪朝したきっかけは朝鮮に対する直接的な関心というよりは、2010年頃から研究のために頻りに足を運んでいる朝鮮学校と朝鮮の関係、特にそこに通う生徒たちにとって、朝鮮の意味は何だろうかという関心から朝鮮行きを希望するようになった。

特に朝鮮高級学校（朝高）の3年生が2週間の訪朝（修学旅行で「祖国訪問」と呼ばれている）から戻ってきたとき、私は衝撃に近いものを感じたのだ。生徒たちは言葉を尽くして朝鮮の良さを私に伝えようとするが、私には全くピンとこないし、共感もできない。生徒たちの心はまだ平壤にあるようで、私にはかれらがとても遠い存在に感じたのだ。

「行ってみないとわかりませんよ」ある男子学生からこう言われ、私自身、日本の「北朝鮮報道」に影響を受けていたことに気づいた。「朝鮮は楽しい」「朝鮮の人は素朴でやさしい」などと言われても、それが全く想像できない状態にあったのだ。そう気づいて、私は朝鮮学校のことを「内在的に理解する」ということを目標に研究に取り組みはじめていたので、「ならば行ってみたい！」と思うようになった。さらにできるならば、「愛知朝高の『祖国訪問』に同行したい」とその希望を口にした。

ただし、その希望の実現には制度的な困難があったため、朝鮮学校関係者および朝鮮と密接な関係をもつ日本朝鮮人総聯合会（総聯）の人たちに相談を重ね、とにかく、朝鮮の受け入れ機関である対文協に私を知ってもらい、信用してもらい、それが大事だから、機会をみつけて、訪朝したらいいとアドバイスをもらった。そし

て、2011年10月に現地4泊5日での初訪朝が実現した。

日本人は私のみ、総聯の職員と朝鮮に（1959年から始まったいわゆる「帰国運動」によって）帰国した妹さんたちに会いに行くという年配の在日朝鮮人女性と3人で北京を経由して平壤に向かった。

この年配の女性は末期ガンで余命いくばくもない、ならば生きているうちに妹家族に会いたい、自分の財産を渡したい、そんな希望をもって、ある意味「決死の覚悟」で平壤行きを決心していた。日本は朝鮮の核実験などを理由に2006年から独自の経済制裁を行っている。そして、朝鮮の人の日本への入国は一切認めないという措置をとっている。だから、この女性は病を押して、平壤に行くしか家族に会う方法はないのだ。

平壤でどんどん状態が悪化するその女性の看病をしながら、妹さんたちが「本当は私たちが一緒に日本に行って看病でできればいいのですが……。ここでは抗がん剤治療は難しいかもしれない。痛みだけをとめて、姉さんが死んでいくのを待つしかない。日本で可能性があるならば、一緒に行つてあげたい」と語るのを聞いて、私は返す言葉がなかった。

経済制裁の効果については、その効果を疑う声も出ている。実際に平壤に行くと、中国経由で日本製は流通している。また、国交があるヨーロッパ各国からは「ビジネスで来た」と言う人にもたくさん会う。では、誰が一番困っているのかといえば、おそらく在日朝鮮人であろう。そんなことを実感させる経験だった。そして、これまで長く在日朝鮮人に関わる研究を行う中で、耳にはしていたが、はじめて目の当たりにする現実でもあった。（この女性は朝鮮から帰って、しばらくして亡くなった。参列者がほとんどいない淋しいお葬式だった。）

この女性とは平壤で行動を別にし、私は正味3日間の日程をこなした。はじめて言葉を交わす朝鮮の人々との会話を楽しみ、——当たり前のことだが、私が韓国で覚えた言葉が通じる——朝鮮語を話す私をみて、とても喜んでくれた。平壤市内は社会主義国家の首都らしく、大型の建造物があちらこちらに建てられているが、一步郊外に出ると、まるで韓国の地方にいるようなそんな錯覚を覚えた。土の色、人の雰囲気などが同じなのだ。60年分断状態にあっても、自然というものは変わらないんだと感じた瞬間でもあった。ちょうど、分断の最前線板門店に行く途中だったので、「ソウルまで70キロ」という看板を見て、胸が痛んだものだ。板門店で多くの国が国連軍という名称で朝鮮戦争に参加したことを確認して、いまだ休戦状態のこの戦争の責任は？ とも考えた。戦争はまだ終わっていないのだ。

お世話になった対文協の案内員はウィットに富んだ会話が上手で、私はそれを楽しんだ。ニヤリとしたり、吹き出したり連続だったと記憶している。向こうも私の悪のりをずいぶん楽しんでくれたようだ。

こうして対文協との人間関係を作り、その後も2012年6月、そして前述した2012年8月と合計3回の訪朝の後、2013年6月、11泊12日で愛知朝高のプログラムに合流する形で私の調査希望がほぼ叶った⁴⁾。愛知朝高の生徒たちが朝鮮の歌を歌う場面で、「僕の人生観、祖国観がかわりました。祖国に感謝しつつ、僕は日本で朝鮮人らしく生きていきます」とスピーチしているのを見て、おそらく以前だったら、この言葉に違和感のみ感じただろう、でも、今は、この生徒が話している意味も何となく理解できると思っていた。横で対文協が「日本人にこういう場面をみせると『洗脳された』と言うでしょ？ だから、見せたくない。でも、山本先生を信頼してこの場にいます」とコメントした。かれらは、日本人を受け入れてきて、現地ではいいことだけを言い、そして日本に帰ると朝鮮の揚げ足取りのようなことを言われるという経験をしてきている。もちろん、社会体制が大きく異なり、私たちとは異なった価値観で生きている朝鮮の人が言うことに違和感を感じることは多々ある。本稿でも若い二人は、そうした違和感を述べている。しかし、私が感じているのは、「ここにも同じ人間の生活がある」ということだった。だから、そう伝えたら、対文協は「わかりました」と答えた。

2013年6月の訪問は期間も長く、一人での訪問だったので、対文協と話しをする機会がたくさんあった。過去の担当案内員も順番にでてきてくれ、再会を喜び、食事をともにした。これも様々な制限があるから、会いたい人に必ず会えるとは限らない、しかし、人間同士の心のふれあいがあるから、向こうも時間を作って会いにきてくれるし、担当していた二人の案内員も「〇〇さんに会う時間を作りましょう」と積極的に調整してくれた。

このような時間を使って、今年8月に学生をつれて再訪朝したい意志を伝え、日程の希望を述べた。つまり、工場見学などよりも、できるだけ人に会えるプログラムを組んでほしいということだ。帰ってからも、メールで連絡を取りながら、こちらの希望を伝え続けた。結果、とてもいいプログラムが用意され、朝鮮の人の生活を垣間見ることができたと思う。

朝鮮の良さを人に伝えるのは難しい。私は「朝鮮マジック」と呼び、在日朝鮮人の研究者は「ウリナラ（私たちの国）マジック」と呼ぶ、その魅力。訪問後、しばらくは現実に戻るのが困難に感じるほど、「朝鮮」に

浸ってしまう。それはなぜか？ 私はおそらく、日本でのイメージと現実の朝鮮でのギャップにあるのだと思う。日本で報道されることと私が見てきたもののギャップ、あまりの落差のせいではないかと考えている。

9月26日に本学のサテライトで行った報告会で、共著者の二人が見せた何でもない町の動画に参加者は感動していた。町に音があること、バスやトロリーバスが走り、人が乗っていること、そこに映る表情はよくテレビで映る軍事パレードの表情ではない、それに感動したと聞き、いかに日本の報道が歪んでいるのかを感じたものだ。

私たちの報告は「朝鮮のプロパガンダのみを話した」という批判も受けた。もちろん、社会的・政治的な制約で、私たちが見たもの、訪ねた場所はモデルコースだ。しかし、平壤も人が生活しているので、バスの中からそのモデルからこぼれ落ちるものも見える。さらに地方にいけば、その道中、朝鮮がまだまだ大変な状況にあることは容易に想像できる光景が広がる。しかし、私たちの役割は、そういう現実を認識しつつ、朝鮮のマイナス面をあげつらうのではなく、朝鮮で見たこと、感じたことを伝えることなのだと思っている。

9月26日の報告会が終わったあと、何人かの教員からこれを調査報告として文に残したらどうかという提案を受け、この調査ノートを送稿することにした。

私自身は、研究者として研究のいっかんで朝鮮を訪問しつづけていることは述べた通りだ。しかし、これから大学院に進学予定の若い二人が感じたことはなんだろうか？ まずは、二人の参加動機を以下に紹介する。

2. 朝鮮を訪問した動機

なぜ朝鮮に行こうと思ったのか。まずは好奇心だ。「近くて遠い国」である朝鮮に好奇心を抱かずにはいられなかった。

今でも覚えている。1年前の夏休み、初めて山本かほり先生の研究室を訪ねた。

「昨日まで朝鮮に行ってきたんだ」

「北朝鮮に行けるんですか。どうやって……」

恐らく、これが一般的に浮かぶ疑問ではないだろうか。

当時、北方領土の択捉島から帰ってきたばかりの私は、その興奮もあってか「未知の国」を知りたいという欲求を抑えることができなかった。

「来年、私も連れて行ってください」

1年後、本当に朝鮮の地に足を踏み入れることになるとは思ってもみなかった。

日本のマスコミが朝鮮を報道する量は多い。新聞の国際面でも頻りに「北」の文字を目にする。しかし、それらは政府の動向や体制批判ばかりである。さらに、報道されるニュースには何重にも編集の手が加わっている。国際関係や外交、歴史から語られる朝鮮ではなく、一般市民の現状を肌身で感じたいと思った。訪朝前から移動や写真撮影など様々な制限があることは承知していたが、それでも他者の媒介を通さない生身の人間の姿を見たいと考え、何の想像も期待も持たずに日本を発った。

(伊藤)

今回の訪朝団団長である山本かほり先生が在日朝鮮人に関する研究を行っていることは何となく知っていた。しかしまさか朝鮮に足を運んでいるとは思ってもしなかった。

朝鮮へ行って帰ってくるたびに、冗談めかして「これからは革命的に仕事をするよ」(朝鮮では「一生懸命」という意味で「革命的」という言葉を使うらしい)と言いながら、懐かしそうに大切に思い出を語る様子を見ていた私は、思わず「朝鮮へ連れて行ってください」と話しかけていた。軽い気持ちで声をかけたので、朝鮮行きが実現することはないだろうと思っていた。しかし、あれから1年余りが経ち、本当に訪朝団の一員として朝鮮へ行くことになった。

それまで朝鮮についてはほとんど何の知識も情報も経験も無かった私は、実際に訪朝することになり「朝鮮」について考えてみることにした。日本社会で、普段私たちが目にする朝鮮に関する情報は、極めて限定的なものである。ミサイルや拉致問題等、険悪な国際情勢を語る

立場と、日本やアメリカの過去の過ちを忘れてはならないという立場の攻防が永遠に続いているように思える。そして、その渦中で傷つけられていく人たちと、かれらを守ろうとする人たちがいる。

しかし、平壤の町並みや農村の風景の様子を伝えるもの、そこで暮らす人々の生活は一体どのようなものなのか、それらを知るための情報はほとんどなかった。また、朝鮮の人々は自国について、また日本についてどのような考えを持っているのであろうかとも思った。これらの疑問を解くには「社会主義」が深く関係しているような気がして、自分が経験したことのない体制の下にある朝鮮の「日常」を体感したいと思った。また、朝鮮が用意したプログラムのすき間から垣間見えるかもしれない「ほころび」も見てみようと思われ日本を出発した。

(小笠原)

3. 日程と受け入れ機関について

今年の訪朝団は8月23日に名古屋、大阪、東京と各地を出発、北京で合流した。日本と朝鮮には国交がないので、ビザを第三国で受け取るしかないのだ。今回は北京の朝鮮大使館でビザを発給してもらった。

北京一泊後、8月24日午後1時すぎの飛行機で平壤に向かう。飛行機はヨーロッパ、アメリカなどからの観光客、出張帰りの朝鮮人などで満席だった。平壤までは約2時間、到着は現地時間午後4時過ぎだった。名古屋を出発したのは前日の朝9時半なので、二日がかりの旅となる。直行便があれば2時間程度で到着するはずだから、やっぱり「近くて遠い」国なのだ。

飛行機を降り、入国手続き、税関を出ると、私たちの

2013/8/23～29 訪朝団日程表

	午前	午後	夕方
8/23(金)	9:20 出国(名古屋→北京)	14:00 北京の朝鮮大使館にてビザ申請・受給	北京泊
8/24(土)	9:00 ホテル出発	13:00 出国(北京→平壤) 17:30 万寿台銅像に献花	18:00 平壤ホテルチェックイン 21:00 留学同との交流会
8/25(日)	8:00 ホテル出発	13:00 妙香山・国際親善展覧館 14:00 野外でバーベキューなどの食事 16:00 平壤へ出発	
8/26(月)	9:00 ホテル出発 9:30 万景台故郷の家(金日成主席故郷の家) 10:00 祖国解放戦争勝利記念館	15:00 金策工業総合大学 交流会・電子図書館 16:30 チュチェエ思想塔	18:00 タンコギ(狗鍋) 20:00 大マスゲームと芸術公演「アリラン」
8/27(火)	7:30 大同江を散歩 8:20 ホテル出発 8:30 原爆被害者・強制連行被害者遺族証言 10:30 金正淑託児所	12:00 平壤冷麺 14:30 平壤国際サッカー学校 16:00 平壤学生少年宮殿	20:00 凱旋青年公園(遊園地)
8/28(水)	8:50 ホテル周辺を散歩 9:30 ホテル出発 10:00 三大革命展示館 11:00 対文協表敬訪問	15:00 順安協同農場	お礼の食事会
8/29(木)	8:30 ホテル出発 10:30 帰国(平壤→北京、北京→名古屋)		

受け入れ機関である対文協の職員が待っていた。対文協は民間交流の窓口である。単なる観光旅行の場合は「朝鮮国際旅行社」が受け入れ観光名所をまわるようだが、対文協が受け入れると、様々な交流事業が可能になる。

今回の担当案内員は、私にとっては、すでに4回目。特に前回の訪朝時には12日間ずっとついてくれた人なので、気心がある程度しれた関係だ。メールでのやりとりの窓口でもあった。

彼は1977年生まれの36歳。2005年に対文協にはいった最若手だ。4歳の女の子のお父さんで、娘のことを聞くと少し照れながらも、自慢話をする。朝鮮は就学前の1年が義務教育で幼稚園に行くが、彼は早期教育を受けさせるべく、1年早く幼稚園に入れている。娘はもう字も読めるし、ピアノを熱心に習っている親バカぶりを発揮する。平壤では今は教育熱が高まり、こうした「早期教育」「英才教育」に親たちが熱心だという。

もう一人は女性の案内員。1976年生まれ。1997年に対文協に入った。日本局では唯一の女性で、4歳の男の子のお母さんだ。仕事柄、外泊も多く、また帰宅時間も遅くなりがちであるが、子どもを通所の託児所にいれて働いている。夫は船舶関係の仕事をしていると話していたが、「家の中のこと何もできない！」と嘆く姿は、私たちと何も変わらない。朝5時起床、アパートの水が出るのは6時から7時の1時間なので、その間に水をため、洗濯機を使って洗濯をするという。水は貴重なので、一日の分を気を使いながら使用するという話も、平壤に行かないと聞けない話だ。私たちの生活感覚からすると「大変だな」と思うが、それが当たり前の生活だから、それなりに工夫をしながらやりくりしていることがわかる。

息子のいたずらをうれしそうに嘆く姿も微笑ましい。そして、すでに子どもの大学進学についてあれこれ心配しているのを聞くと、ここは「競争社会」なのだと感じる。彼女もやはり前回6月についてくれ、私は2回目。女性同士なので、親しみを感じていた。都はるみの歌がとても上手な人だ。

対文協の日本局の職員は合計8人だという。1990年頃は、たとえば故・金丸信自民党議員が訪朝するなど、国交正常化か！という機運がたかまり、訪朝団もたくさん来ていたので、職員も多かったという。しかし、日朝関係の冷え込みの中で、日本局の職員は減っていった。

日本局長（現 対文協副委員長）をはじめ、ほとんど全員が平壤外国語大学で日本語を専攻した人たちだ。平壤外国語大学は外交官を養成するエリート大学である。

でも、かれらは日本語を専攻したために、なかなか国外で活躍する機会がない。仕事も限定されており、日本語を専攻したことを少し後悔しているようだ。局長は後輩たちの就職に話題が及ぶと少し機嫌が悪くなるほどだ。

平壤外国語大学の日本語専攻は、いまは「民族語学科」の中の一専攻になってしまっている。学生数も20人前後しかいないそうだ。日本語専攻の学生も日本語のほか、英語や中国語の勉強に必死になっていると聞いた。就職に有利なのは、それらの言語だからだ。

しかし、かれらの日本語は実に達者だ。日本語ネイティブの先生に習う機会はほとんどなく（在日朝鮮人の先生が集中講義で来ることがあるという）、教材は『フーテンの寅さん』が「生きた」教材だという。（案内員の中には、寅さんの口上をスラスラと言える人もいる。）そんな学習環境でありながらも、見事な日本語を話す。メールも、たまに日本語でくるが、なかなか立派な日本語だ。

ところで、案内員がつくと聞いて、多くの人は「監視でしょ？」と聞く。確かに、その面があることは否定しない。しかし、一緒に時間を過ごしていると、監視をされているような感覚はほとんどない。もちろん、「問題行動」を起こす人には常に警戒をするだろうが、通常のルールを守って行動する限り、かれらはよきガイドであり、私は朝鮮式に親しみと尊敬を込めて「案内員同志」と呼ぶ。また、朝鮮を再訪したい理由のひとつが「かれらと再会したい」である。私の人生にとって、とても大切な人たちとなっている。

私は、昼のプログラム終了後の夜、スイッチオフ状態になったかれらといろいろな話をするのが最も楽しみである。歴史問題、日朝関係、在日朝鮮人問題など、まじめな話もするが、実はみんなカラオケが大好きで、日本語の歌を歌いまくる。「どこで練習するのですか？」と聞くと、ニヤリとして「地下室です」と答えるウィットに感心もする。

こんな対文協の案内員とともに朝鮮滞在中のプログラムをこなした。その日程は、大体初日に提示され、そこで、最終調整が行われる。今回の最終的な日程は別表の通りだ。

かなり忙しく盛りだくさんの日程ではあったが、参加した二人が特に印象に残ったプログラムについて、以下、報告してもらおうことにしよう。

4. 報告

盛りだくさんのプログラムの中で、私たちがこの報告文にのせることにしたのは4つである。人との交流が

あったもの、そして、朝鮮ならではのマスゲーム「アリラン」だ。

4-1. 金策工業総合大学での学生との交流

この訪朝団の特徴は朝鮮の大学生との交流プログラムがもうけられることだ。

「祖国」訪問中の留学同の学生とともに、同年代の朝鮮の学生たちに会えることを楽しみに参加した。

交流先の金策工業総合大学は、1948年に国の発展のための人材育成を目的に開校された朝鮮唯一の科学技術大学であり、トップ校の一つだ。現在学生約1万5000人が学び、教職員数は2000人いる。

指定された部屋に入ると、指導教員を真ん中にして男子学生が4人座っていた。どこかまだ幼さが残る顔からは自信がみなぎっていた。かれらは今年6月に開催され、100カ国およそ3400チームが出場した国際大学プログラミング競技で、初参加ながら優勝したメンバーだという。かれらの話によると、問題が10問提示され、9問が一般問題で各1点、残り1問は調整問題で正しい回答に近づくほど点数が高くなるといった競技だという。競技期間中は、午前には講義を受け、午後にはプログラミング競技に参加という多忙な日々を送りながら、優勝を勝ち取ったという。

かれらは朝鮮ではトップだといわれる平壤第一中学校の数学秀才班を卒業したエリートだ。かれらの話の中で特に印象に残ったのは、国家に対する言葉であった。「ありがたいことに社会主義的教育制度の下、党と国家の愛情を受け、勉強している」「2013年7月27日は、祖国解放戦争（朝鮮戦争）の勝利記念日。自分たちは何をもって60周年を祝うのか、人民と祖国を盛り上げよう、強盛大国建設のために競技に参加した」のだと。しかし恵まれた環境で勉強しているせいだろうか、「言わされ

ている」とは感じなかった。おそらく本心なのであろう。

また、微笑ましいエピソードもあった。学生の一人が、あまりのハードスケジュールのため、風邪をひいて寝込んだ際、チーム長の学生がわざわざ自宅に戻り鯉のスープを作って持ってきてくれたというものだ。そこに仲間の大切さを感じたと語っていた。そして、優勝には4人の学生の信頼関係が何より大事だったと聞いたとき、なぜかホッとした。

最後に質疑応答の時間があった。私たちは将来の夢や趣味、休日の過ごし方など当たり障りのない質問をした。かれらは恥ずかしそうにして、なかなか答えようとしなかった。指名されて答えた学生の口からサッカーやバスケットといった答えが返ってきたものの、勉強が生活の中心のような印象を受けた。しかし、場がほぐれると朝鮮学生の一部が「これまで教えた学生で世界的な水準に達している学生はいますか」と団員の大学教員に質問した。質問された教員は上手く返答していたが、大学生であるかれらは「世界水準」を目指しているのかとこの質問には驚いた。「世界」を舞台に戦おうとしているかれらにとってはごく普通の質問だったのかもしれない。並々ならぬ努力と熱い野望がみえた。

4-2. 「アリラン」

これだけは何が何でも観たかった。テレビで一度は目にしたことのあるあの集団パフォーマンスだ。2万人近い中学生が人文字など背景を担当し、場面ごとに大勢のパフォーマーが一糸乱れぬ動きで観客を魅了する。10万人もの人が出演し、ギネス世界記録にも認定された公演を一目見ようと会場であるメーデースタジアムには、外国人観光客をはじめ朝鮮人も多く足を運んでいた。

「アリラン」は金日成主席生誕90周年を祝って、2002年4月14日に初披露された。朝鮮民謡「アリラン」を



大学の入室で教員と4人の学生から話を聞く



開幕前に所属区域名を示している



公演中の一幕

テーマに、植民地の苦悩や抗日パルチザン、独立、朝鮮戦争を経て社会主義国家建設のプロセス、そして朝鮮民族統一への希望を表現した各章から、物語として構成されている。

スタジアムに入るとすでにマスの背景は準備が完了しており、練習なのか、開幕前には、背景を担当するそれぞれの中学校の区域名を競うように掲げる。その動きには圧倒される思いがした。

20:00。通路の柵が閉じられ、まだ席に着いていない朝鮮の人々が柵の前で警備員と押し問答しているのをよそに「アリラン」は開幕した。およそ1時間半の公演を説明することは容易ではない。「アリラン」の「売り」は何と言ってもその迫力だろう。何万人もの人々を動員し、子どもから大人まで、プロもいれば一般人も多数参加する。「集団主義の集大成」とかれらが言うように、統率された動きは、まさに私のイメージする「社会主義」だった。

右写真の背景には「勝利7.27」とある。朝鮮戦争が休戦となった1953年7月27日に「勝利」したことを示している。朝鮮では戦争に勝利したという。それは、朝鮮

が建国間もない時期だったにも関わらず、超大国アメリカ及びその追随国と戦い、アメリカ側が停戦談判を求めてきたためだという。今年は休戦協定締結（朝鮮では「祖国解放戦争」勝利）から60周年。そのためアリランもこれをモチーフにした場面が強調されていたのが印象的だった。

4-3. 金正淑託児所

平壤市内にある、金正淑氏（キム・ジョンスク：金日成主席の妻であり、金正日総書記の母）によって建てられた朝鮮初の託児所である。敷地は7,600㎡で、5階建てという大きさであり、収容人数は450人で常に満員である。庭には日本の幼稚園にみられるような遊具が並んでおり、私たちは久しぶりにすべり台などで遊んだ。ここは「週間託児所」と呼ばれる託児所で、両親が夜遅くまで働いていたり出張が多かったりする家庭が子ども（2歳半から4歳）を月曜日から土曜日まで預ける。この間子どもは家に帰ることなく、託児所で他の子どもたちと生活をする。託児所は国家負担で運営され、保護者は預ける子どもの分の米の配給券を提出するそうだ。

この金正淑託児所は早期教育・高水準の教育で有名で



金正淑託児所の外観。薄赤色の建物



授業風景

大変人気があるそうだが、女性の案内員は「自分の子どもを入れる決断がつかない」と言っていた。子どもたちは託児所で社会主義特有の英才教育を受け、朝鮮に関する知識や歌や遊戯、そして集団生活を通して組織規律に対する従順心や集団主義精神を身につける。このような教育は確かに魅力的だが、自分の子どもを週6日間も託児所に預けたままにすることにはやはり抵抗があるだろう。「自立心は芽生えるけれど、なかなか……」と迷いを何度も口にしていた。

託児所では、子どもたちが、歌、踊り、楽器演奏で歓迎してくれた。みな能力は高く、一体どの程度の練習を経てここまで至るのだろうと思った。朝鮮に行って驚いたのだが、朝鮮の人は総じてみな歌がうまい。それはこのように幼少期から練習を重ねているからなのであろう。家庭ではどのような教育がなされているかが気になるところである。解説員に付いていくつかの部屋を案内してもらった。「金日成主席の幼少期」という科目を学んだり（この科目は小学校でも学習する）、パズルや積み木をしたり、舞踊の練習をしたりと様々な時間が流れていた。先生は終始笑顔で熱心に指導をしており、子どもたちはみな真剣にそして楽しそうに取り組んでいた。この託児所ではこのように幼少期から親元を離れて集団生活をし、集団教育を受けるといふ社会主義的教育が徹底されていることを感じた。

4-4. 順安協同農場

プログラムの最後は平壤市郊外の順安にある協同農場を訪れることだった。ここは金正日総書記が何度も訪問し、農業を手伝いながら現地指導を行ったモデル農場だ。現地に着いて、まずは、農場についての説明を受け、金正日総書記が実際に使用した農具や食器が展示されている家を見学した。また、金正日総書記の訪問を記念する石碑も建てられていた。朝鮮滞在中に、指導者の「現地指導」に関する説明は何度も受けるので、最終日

になると「そうなのか」程度の感想になる。

農場案内員の説明によると、この順安協同農場は平壤第一中学校の全生徒の集団野営を組織し、農場の手伝いや文化活動を行うことによって組織性や規律性、道徳精神を身につけ、学校で学んだ知識を実践で活かす場となっているようだ。

また、朝鮮では国民は皆（ホワイトカラーも含む）が「援農」を行う。重機や燃料が不足しているため、農作業の多くは手作業で行われ、人手不足の状態である。そこで援農は田植えや収穫などの農繁期に2週間ほど泊まりこみで行われ、主に男性は農作業、女性は軽作業や食事の準備等をするという話も聞いた。

一通り案内を受けた後、農場が一望できる場所に行き、農民たちとテーブルを囲んで交流会を行った。かれらは農場で穫れた新鮮な果物や、米で作った餅やアヒルの肉（朝鮮でアヒルはおもてなし用の食材である）を用意してくれた。それを、皆で食べながら色々な話をした。私たちは朝鮮語がわからない（山本先生は朝鮮語を話す）ので、平壤外国語大学の日本語専攻の女子学生が通訳としてついてくれた。他愛無い話で盛り上がり、恋愛の話になった時にある朝鮮の農民が「朝鮮の女性も日本の女性も関係ありません。皆さんはとても優しく、私の国に関心を払ってくれていて素晴らしいです」と語ってくれたことがとても印象に残った。

その後、農民たちは歌や踊りで私たちを歓迎してくれた。アコーディオンの演奏に合わせて歌ったり踊ったりする様子は、テレビでみる一昔前の歌謡ショーのようであった。朝鮮では、電源など不要でどこでも演奏できるアコーディオンは花形楽器である。皆の歌は驚く程上手で、かれらが幼少期から歌や踊りを練習し続けてきている様子が頭に浮かんだ。私たちも覚えた歌を口ずさんだり、手拍子をしたりして楽しいひとときを過ごした。とても素朴な交流会だったが、強く印象に残るプログラム



農場の風景



金正日総書記石碑前で説明を受ける

であった。

4-5. 番外編「深夜のカラオケ」

帰国前夜、平壤ホテル6階にある展望レストランで対文協の案内員へのお礼食事会を開いた。私たちは、バスの中で練習した朝鮮の歌を案内員に披露し、一人ずつ訪朝の感想や感謝の言葉を述べた。案内員からもそれぞれ返礼があり、感傷的な気持ちになりながら一週間を振り返った。

その後、2階の喫茶店へと移動し、宴は続いた。お酒を片手にお喋りは止まらなかった。閉店とともに店を出たが、完全に出来上がった団員の一人が「カラオケに行こう」と言い出した。案内員は「あいているお店を探してみる」と言ってくれ、私たちはその結果を待った。その日は青年節（金日成主席が1927年8月28日に、中国吉林省で「共産主義青年同盟」を結成した日にあたり、青年たちは職場単位でレクリエーションに出かける）でどこもお店は閉っていたのだが、一軒だけやっているというので00:30に平壤ホテルを出発した。

それまで通ったことのなかった道路をバスは走り、カラオケ店へと入っていった。日本語の曲もたくさんあり、比較的最近の歌も入っていた。日本と朝鮮の歌をそれぞれ歌い、楽しいひと時となった。最後は全員で肩を組みながら「タシマンナプシダ（また会いましょう）」（朝鮮で覚えた歌のひとつだ）を歌い、店をあとにしたのは深夜2:30だった。

朝鮮でカラオケができるとは思っていなかったし、ましてや、こんなに日本語の歌があるなんて！と意外ではあった。対文協の案内員、それまで控えめで私たちの会話になかなか加わろうとしなかった運転手さんも交えて、みんなで歌って騒いだことは、番外編のプログラムとはいえ、いい思い出である。最終日だったので、疲れ果てて、先にダウンしていた団長をはじめ何人かの団員は、翌日、この話を聞いて、あきれながらもとてもうらやましそうだった。

5. まとめにかえて

5-1. 訪朝してみて感じたこと (1)

今日、ネットメディアの普及・発達によって様々な情報が溢れ、「真実」を見極めることが非常に困難となっている。特に、朝鮮に関するニュースは情報源が限られているため、私たちが持つイメージはどうしても偏ってしまう。ジャーナリストを志望している私は、自分の目で朝鮮を見ることができこの機会を逃すわけにはいかないと考えた。情報が限られた国のことを少しでも知りたかった。そして自分の目で見て感じてみたいと思った。

平壤市内でまず感じたのは、街にあまり生活臭がないということだった。街に賑わいというものはない。平壤市内の整備された道路にはゴミひとつ落ちていない。市民が毎日掃除をしているからだと聞いた。自家用車の所有は制限されているため道路に車は少なく、騒音もない。一方、市内には高層マンションが立ち並び、近代的な様相も見られる。国旗や肖像画、標語はあちこちに掲げられている。資本主義社会の「商業的」な街の様子に慣れている私は、不思議な違和感を覚えた。

しかし、確かにそこには人が住んでいた。今回の訪朝では多くの人と出会う機会に恵まれた。各訪問地で出会った人々、ホテルの従業員、対文協の案内員など私が接した人々は心から笑い、私たちとも他愛のない話をした。そして街には、楽しそうに歌って踊る人の姿もあった。私にはとても幸せそうにみえた。

初めて現地の人の笑顔を見たとき、「あっ笑うんだ」と当たり前のことに反応してしまった。仕草や動作、服装や髪形、歯並びや爪の長さに至るまで全てが新鮮だった。特に、女性が高いヒールの靴を履いていたのには驚いた。制服姿の中高生や足場の悪い農村の女性たちもヒール靴を履いて歩いている。今のファッションなのだ。中高生のヒール靴は問題になっていて、高さを制限しているということだった。朝鮮の女性は、非常に外見に気を遣っているようだ。頻りに窓ガラスを見て髪を直していたりと、美意識が高いと感じた。こういったことは、現地に行かなければわからないことである。

毎日10時間寝るという農村の青年は「それは寝すぎですよ」と皆からつかまわれ、カラオケで私たちが歌う日本の曲が気に入り、携帯電話に録音する対文協の男性、薄くなった髪をネタにしてからかわれる別の対文協の男性、「この（団員）中で誰がタイプ？」などと運転手さんにも冗談を言い合うシーンも多々あった。

日本でもよくあるシーンではないか。今回、私が見て感じた朝鮮は、ほんの一部でしかない。現地で、子どもの教育に関して夫と喧嘩するというごく普通の話を目にしたり、「共和国では飢え死にしている人はいない」と朝鮮人が何気なく発した一言も私にとっては「ニュース」に値することだった。

行動には制限があり、案内員なしではどこにも行けない。どこか自己規制するような雰囲気もあり、息苦しさを感じたときもあった。しかし、それでも訪朝してみなければ何もわからないのだと実感した旅でもあった。

帰国を翌日に控えた夜、対文協の案内員に言われたことが忘れられない。「一人ひとりが人間であることを忘れないでほしい。どこに行っても、そこには人間が住ん

でいるのです」「大切なのは人間（じんかん）関係ですよ」と言ったのだ。「朝鮮はこういう国だ。日本とは違うけれど仲良くしていきたい。」かれらが友好を示すための精一杯の言葉であったのではないだろうか。かれらは日本という国家と、日本人である私たち人間を分けて考えている。日本人もそうであってほしいと願っているようであった。

訪朝して2カ月が経つが、私自身、朝鮮とどう向き合うべきか上手く整理ができていない。しかし、明言できることは再訪朝したいという気持ちがあることだ。それは、また会いたいと思う人がいるからである。ネットの発達によって、海外と容易に繋がりがもてるようにはなったが、朝鮮とはそれもなかなか難しい。まだまだ「近くて遠い国」である。

「ジャーナリストになって、本当の朝鮮を伝えてほしい」という対文協に言われたその約束を果たす日まで、日々精進していきたい。

最後になるが、山本かほり先生はじめ訪朝でお世話になった皆様に感謝の意を表し、報告を閉めたい。(伊藤)

5-2. 訪朝してみて感じたこと (2)

平壤市内には高層マンション群が建ち並んでいるが、市内から少し離れると農村風景が広がる。農作業や道路工事には、たくさんの人が出ていた。日本では見慣れない風景だが、機械や燃料不足のため人海戦術で行われているのだと聞いた。また、平壤市内では夜、道路の街灯の下に学生が集まって勉強をする姿がみられるという。私は少しでも平壤の人々の日常生活にふれたく、時々お湯が出なかったり電気がこなかったりするが、とても快適な平壤ホテルの窓から網戸越しによく外を眺めていた。

様々な制約があり、訪れることのできない場所はあるが、今回の訪朝プログラムは大変満足のいくものであった。限られたもの・限られた人としか接することができなくても、それでも実際に訪れることによってこそみえたものがたくさんある。

朝鮮の人々は行く先々で私たちに歓迎してくれた。人の温かさを感じたが、時に歓迎の歌や踊りは作られた見せ物のように感じることもあった。

また、朝鮮の制度等ほとんど何も知らないが、至る所で社会主義の片鱗をみることができた。日本とは体制は大きく異なるため理解し難いこともたくさんあったが、朝鮮の人々は苦勞しながらもごく普通に暮らしているようにみえた。

最後に、今回の訪朝で出会った人々について少し述べたい。

朝鮮滞在中は「祖国」訪問中の留学同の大学生らと共に行動する機会が何度かあった。かれらは在日朝鮮人であり、日本で生まれ育ち、生活し、日本の大学で学ぶ朝鮮人学生である。色々な境遇の人がおり、日本の学校に通っていた者や朝鮮学校に通っていた者、家族の教育方針や朝鮮語の能力等様々であるが、かれらは皆とても明るく、そして強い「想い」を持った人たちだと感じた。

朝鮮に着いた日の夜、滞在していた平壤ホテルで訪朝団と留学同との交流会があり、私はそこで初めてかれらと出会った。私はこれまで在日朝鮮人の人たちと接したことがなかったので、どのように接したらよいのか少し不安に思いながら席についた。「将来は弁護士になり、自分たちが叶わなかったことを後輩にはさせたい」と語ってくれた二人の男子学生や、「卒業したら留学同の専従職員になろうと思っている」という女子学生と話し、とても真剣に「祖国」のことを考えるかれらの姿に大きな刺激を受けた。家族や仲間のため、次の世代のため、そして自分のためにかかれらは日本政府や社会、周りからの目、そして自分自身と戦っている。

また、訪朝団メンバーには色々とお助けられた。特に団長である山本先生には参加前から参加後まで大変お世話になっている。彼女と一緒に訪朝することはとても大きな意味があったと感じている。社会学者としても人間としても彼女から学ぶことは多かった。社会調査を行うとき、インタビュー調査などよりも、参与観察という調査方法に私は強い関心をもっている。「調査対象者たちと行動を共にすることによってかれらの日常を観察し、設定されたインタビューなどからはこぼれ落ちる情報を自然に拾い集める。」この方法は、写真やメモを積極的に取るのではなく、同じ環境に身をおき、日々共に過ごすことを通じて、対象者たちと信頼関係を築き、かれらの心の声を引き出すことができるという強みがある。対象者たちの心の声を引き出すには、相手と真摯に向き合うことや相手の気持ちを尊重することで、信頼関係をゆっくり築いていくことが重要である。今回の朝鮮滞在中、ホテルの従業員や過去の訪朝で知り合った人々、朝鮮で研修中だった朝鮮大学の学生たちが、山本先生をみると大喜びして、そして歓迎している場面に何度も遭遇した。そして彼女自身もかれらとの再会を心から喜んでることが伝わり、みているこちらが感動するほどだった。また、山本先生はどれだけ疲れている時でも、常にメンバーのことを細やかに気遣い、毎晩遅くまで対文協の案内員らと語り明かしていた。このような彼女の姿勢が今回の訪朝団をより素晴らしいものにしてくれたと感じている。私は社会学を志す者として彼女が朝鮮でみせ

てくれたことを大切にしたい。

そして、対文協の案内員たちは、私にとってもっとも近い朝鮮の人たちとなった。かれらは私たちの朝鮮滞在がより良いものになるように、あらゆる場面で親身になってくれた。最終日の夜、深夜のカラオケからホテルへ帰るバスの中、団のあるメンバーが対文協の案内員に向かって「しばらく、この先何年も来ることができないと思う」と話すと、彼は「次来る時までにく涙そうそうを歌えるように覚えておきます。きっと一緒に歌いましょう、約束ですよ」と答えた。二人は相当酔っており、二人がこんなにも酔っぱらっているのはきっと別れが辛いからなのだろうと思った。そして、「このことを明日、飛行機の中で彼女に伝えてください」と、私に託した案内員の言葉と表情に思わず涙をこらえた。二人はきっとこのやりとりを覚えてはいないだろうけれど。

このようにして朝鮮滞在が終わった。様々な出来事を思い返しながらかこの調査ノートを書き上げた。拙い文章であるが、私が伝えたいことが、今これを読んでくれている読者はじめ多くの人々に、そして私の愉快的「同志」たちに少しでも届くことを願っている。(小笠原)

5-3. 朝鮮に若い世代を連れて行って

初めての訪朝、しかもわずか5泊6日の滞在で、朝鮮について何かを理解するのは難しい。冒頭でも書いたし、共著者の二人も書いているように、日本で触れることができる朝鮮報道は、あまりにも一方的だし、そしてネガティブな側面だけを伝え続ける。それらの情報と現地で私たちが実際に見るもの、聞くものとのギャップが大きすぎて、一体何が真実なのだろうか考えてしまう。二人もこの報告を書きながら、その狭間で悪戦苦闘していた。

「朝鮮のいいことだけを書くと洗脳されたと言われるのではないか?」「朝鮮の肩を持っていると言われるのではないか?」と不安を言い、だから、「中立」になるために、少し「批判的なこと」も書いたという。私は、「違和感、嫌悪感は素直に書いていい。しかし、その表現の仕方もある。『中立』とは何をさしているのか? 批判の内容、それは自分で見たことなの? 聞いたことなの? 実際に朝鮮に行ったことがある人が少ない中で、あなたたちが伝えることができることは、あなたたちの『肌感覚』にある朝鮮のはず」と指導しながら、何度か修正をしてもらった。

二人が苦悩したことは、私もいつも苦悩している。「お世話になった朝鮮の人たちを決して裏切ることなく、でも、向こうに迎合しない形で文を書く」と二人に指導したが、これが困難なことは私自身、よくわかっている。

朝鮮について何かを書くと、それだけで「政治的」にとられる。いや、書くだけではない。「朝鮮に行くこと」自体が政治的な文脈で理解され、それを止めようとする空気を感じる。

今年2月に指揮者でオーケストラ・アンサンブル金沢の音楽監督、井上道義さんが訪朝し、平壤で国立交響楽団と公演した。しかし、金沢の議会で議員たちの強い批判が出たという。「『訪朝』は許されることではない」と。知事も「訪朝は常識的にあり得ない」と発言している。(『敵がいる(2) 訪朝公演、『空気よんどらん』『みる・きく・はなす』いま) (『朝日新聞』2013年4月29日朝刊)

私自身も同種の「空気」を感じることもある。しかし、私は研究者として研究のいっかんで朝鮮を訪ねる。その必要があるから行くし、行っている私だからこそ、マスコミが伝えられない朝鮮を伝えることができると思っている。

今回同行した二人も勉強のいっかんとして朝鮮を訪問し、そして、短期間だったが、多くのことを感じて、考えて、帰ってきた。だからこそ、積極的に報告会を開くし、そしてこの原稿も書いたのだ。上記の井上さんが「ぼくは政治家にはできないことをしてきたつもりだ」とコメントしたというが、二人の行為もまさにそれだ。草の根交流しか、朝鮮を理解する回路は今のところないと感じている。

今の日本社会では「北朝鮮」はタブーになってしまっているのだ。「北朝鮮ならば何をしてもいい」「北朝鮮ならば何を言ってもいい」そんな空気が、たとえば朝鮮学校を国や自治体がこぞって「差別」することを容認し、そして在日朝鮮人に対しても歯止めがきかなくなった差別を容認している。

アカデミズムの場所・大学は、こうした「世間」の空気を先取りすることなく、日本社会の「右傾化」「保守化」の片棒をかつがないような、そんなバランスを維持していかなければならない。そんなことを強く感じるこの頃である。

注

- 1) 本論文は、山本、小笠原(愛知県立大学外国語学部スペイン学科卒業生)、伊藤(愛知県立大学外国語学部国際関係学科4年)で分担執筆している。1、3、5-3が山本、2、4、5-1、5-2を伊藤・小笠原が執筆した。
- 2) 朝鮮半島の分断状況をうけて、在日朝鮮人社会も大きく分断されている。南の大韓民国を支持する「在日本大韓国民団」(民団)と北の朝鮮民主主義人民共和国を支持する「在日本朝鮮人総聯合会」(総聯)だ。留学同は、「統一朝鮮」を志向しつつも、その政治的立場は朝鮮支持で、総聯傘下団体である。

- 3) この点については元「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会」事務局長の蓮池透も批判している。たとえば、「被害者意識が増殖している」(『朝日新聞』2013年7月13日朝刊)。
- 4) 2013年6月の訪朝記は「愛知朝高祖国訪問同行録(L/F)」(『朝鮮学校のある風景』20号、21号、ウリハッキョ(朝鮮学校)を記録する会) 参照のこと。

文献

- 石坂浩一編著『北朝鮮を知るための51章』(明石書店、2006年)
- 小倉紀蔵編著『新聞・テレビが伝えなかった北朝鮮』(角川書店、2012年)
- テッサ・モーリス＝スズキ/田代泰子訳『北朝鮮へのエクソダス』(朝日新聞社、2007年)
- /田代泰子訳『北朝鮮で考えたこと』(集英社新書、2012年)
- 高崎宗司『検証 日朝交渉』(平凡社新書、2004年)
- カバン・マコーマック『北朝鮮をどう考えるのか』(平凡社、2004年)
- ファンキー末吉『平壤6月9日高等学校・軽音楽部——北朝鮮

- ロックプロジェクト』(集英社インターナショナル、2012年)
- 山本かほり「愛知朝高祖国訪問同行録 上・下」(『朝鮮学校のある風景』20号、21号、ウリハッキョ(朝鮮学校)を記録する会、2013年)
- 「朝鮮学校における『民族』の形成——A朝鮮高校の参与観察から」(『教育福祉学部紀要』愛知県立大学教育福祉学部、2013年)
- 柳美里『ピョンヤンの夏休み—わたしが見た「北朝鮮」—』(講談社、2011年)
- 吉田康彦『「北朝鮮」再考のための60章』(明石書店、2008年)
- 『北朝鮮を見る、聞く、歩く』(平凡社新書、2009年)
- 和田春樹『北朝鮮現代史』(岩波新書、2012年)

- その他
『朝鮮新報』
『月刊 イオ』など